

近年モンゴルにおける仏教研究概要

M. ガントヤー（著） 松川節（訳）

19～20世紀のモンゴル仏教の大思想家であり、歴史家でもあり、現在のモンゴル科学アカデミーの前身である典籍委員会の初代会員の一人であるザワー＝ダムディン・ガブジ (rTsa ba rTa mgrin, 1864～1937) は、『アルタン＝デフテル』 *Алтан дэвтэр* (正式名称は『瞻部州の北の大モンゴル国の史話の大論、智者を畏怖せしめる驚異の金冊』) において、モンゴルの地に仏教が弘通した歴史を、インド、リ＝ユル Li yul を経由して弘通した前期、モンゴルの大ハーンたちチンギス、オゴデイ、フビライとその他のハーンたちが弘通せしめた中期、アルタン＝ハーンの時代を始めとするゲルー派が弘通した後期という三期に分類した。現在のモンゴル仏教研究者の多くは、このようなアルタン＝デフテルの分類によってモンゴル仏教の弘通史を分類してきている。その際、前期弘通の主たる特徴は、モンゴルに仏教が中央アジアを經由し、特に古代ガンダーラ、バクトリアのシルクロードの結節点になっていたリ＝ユルすなわち現在の東トゥルキスタンの地、中国語でホータン、チベット語でリ、モンゴル語でサルトールを經由してモンゴルの地に至っていたことである。仏教の教義はインドから中央アジアの諸民族を經由して来る際に、パミール高原の北に位置するカラシャール、ホータン、さらにカシュガルに弘通し、その後、当地の智者賢者が仏教の諸経典をサンスクリット語から中国人が「野蛮人【胡】」と呼ぶ民族の言語に翻訳したのだとロシアの仏教学者ボズニエフ Позднеев が記したのである。

一方、中期弘通期はモンゴル人が仏教をチベットを經由して取り入れたことと関連しており、その際、チベット仏教のサキャ派が主たる役割を果たした。また、大元朝の時代にフビライ＝セチェン＝ハーンが仏教の【政教】二理の教

1 Зава Дамдин гавж, 'Dzam gling byang phyogs chen po hor gyi rgyal khams kyi rtogs pa brjod pa'i bstan bcos chen po dpyod ldan mgu byed ngo mtshar gser gyi deb ther zhes bya ba bzhugs so, - Зава Дамдин гавжийн сүнбүм Kha боть, Taiwan, 2009, 39-486 дахь тал.

えをモンゴルの政策に取り入れたことは、この中期弘通期のさらに1つの重要な特徴である。

後期弘通期の時代、モンゴルにチベットのゲルー派が広まり、モンゴル人たちは仏教にこぞって入信し、モンゴルの隅々にまで仏教寺院が建立され、自民族の化身と思想家が生まれ、数多くの著作がなされ、寺院教育のシステムが誕生し、寺院とともにジャス【寺院の経営単位】やシャビ【高僧の弟子組織】といった経済関係が生成されるなど、多くの特徴を有する面を挙げることができる。

現在の研究者たちは仏教史を様々な面から、異なった時代区分によって見ている。我がモンゴル国立大学宗教研究学科から出版した『ラマたちの雑誌』*Ламнарын сэтгүүл* に投稿された「モンゴルにおける仏教史概況」“Монгол дахь буддын шашины түүхчилсэн товч тойм” という論文において、アカデミー会員の Sh. ビラ氏は以下の四区分をなして、仏教のモンゴル弘通を捉えている。

1. 古代・プロト＝モンゴル時代
2. モンゴル時代 (13～14世紀)
3. ポスト・モンゴル帝国時代 (15～17世紀)
4. 満洲支配時代の宗教状況

Ch. ジュグデル Жүгдэр 博士は、モンゴルの仏教思想家の著作を、論釈と刷新という2つの基本グループに分けてみる方法を提案したのであった。モンゴルの仏教思想家たちは、仏教文献を論釈する前にそれらを翻訳するという極めて重要な作業を行ったのであった。それゆえ、報告者は、モンゴル人たちが著した仏教文献を、翻訳、論釈、独立した作品という3時代に分けてみる方法の問題を提起したのである²。

翻訳文献の概要を L. フレルバートル Хүрэлбаатар 博士が『モンゴル翻訳提要』³ という著作によって示した。彼は、翻訳文献を、13-14、15-16、17-18、19-20世紀初頭という4期に区分してみたのである。第1期の主たる代表者として、チョイジ＝オドセル、シャラブセングらを述べ、第2期にザヤ＝パンデ

2 Гантуяа М. Цогтсайхан Д., Классификация первоисточников монгольской философской и общественно-политической мысли. // *Из истории философской и общественно-политической мысли стран Центральной и Восточной Азии*. Улан-Удэ. 1995.

3 Л. Хүрэлбаатар, *Монголын орчуулгын товчоон*. УБ, 1995.

イタ、グーシ=ツォルジを代表として掲げている。第3期にダイ=グーシ=アグワンダムピル、ツァハル=ゲブシ=ロブサンツルテムらを、第4期にスマテイラドナ=ロブサンリンチンの著作について略述している。その際、これら思想家たちの翻訳方法のそれぞれの特徴を示したことは、彼のこの著作の意義を明白にしている。

モンゴルの思想家が行ったことは単に翻訳に限定されておらず、仏教の様々な学問によって記された古代インド、チベットの大量の経典に論釈や摘要を行い、また教科書を著し、さらに、仏教思想を深化・発展させる重要な貢献を行なった思想家が少なくない。第1回モンゴル学者会議においてガブジ・S. ゴムボジャブ Гомбожав は仏教の様々な問題について著作を残した208人の作品を示した一方、2005年に R. ビヤムバー Бямбаа が報告したところによると、この数は500人に達している。

仏教哲学の面でモンゴル人たちが著した著作を論釈と教科書に限定することはできず、仏教教義の最も細かく難解な問題について、独立した研究書を数多く著している。その例として、著名な仏教思想家であるアグワーンバルダン (Ur rge chos rje Ngag dbang dpal ldan, 1797-1864) の『大宗義書の註釈』⁴ という3巻の巨作に言及する必要がある。

さらに、アグワーンハイダブ (Khu re chos rje Ngag dbang mkhas grub, 1779-1838) の『中観・唯識の世俗諦に対する見解を明らかにする書』、ソドノムジャムツ (bSod nams rgya mtsho) の『一切法を理証により決択する因の安立』⁵、ガブジ・ロブサンチョインドン (dKa' bcu Blo bzang chos sgron, 18世紀) の『中観の考究』⁶、ツォルジ・ロブサンチョインジン (Chos rje Blo bzang chos 'dzin) の『中観の理解』⁷、アグワーンダンドル・ルハーダムバ (Ngag dbang bstan dar lha rams pa, 1759-1831) の『自相共相の安立』⁸、『離一別の安立』⁹などの著作を例として挙

4 *Grub mtha'i chen mo'i mchan 'grel bka' gnad mdud grol blo gsal gces nor zhes bya ba bzhugs so.*

5 *Chos thams cad rigs pas gtan la phebs pa'i gtan tshigs kyi rnam bzhad blo gsal mgrin rgyan.*

6 *dBu ma'i mtha' dpyond.*

7 *dBu ma rtogs pa'i ldan pa tsam shi ble'u zil.*

8 *Rang mtshan spyi mtshan gyi rnam gzhaq.*

げることができる。モンゴルの思想家たちのこうした（研究）業績は、仏教国、例えばチベットにおいて特に名を馳せ、これらの作品に基づいて学ぶ学問寺も出現し、モンゴルの思想家の著作をチベットで出版し、チベットの思想家が批評を返していたのである。

モンゴルの思想家たちが著した論釈と独立した著作に共通する特徴は、それらが基本的にチベット語で書かれていることである。中世ヨーロッパにおけるラテン語、近東・中東におけるアラビア語が担っていたのと同じく、同様の役割をモンゴルの地においてはチベット語が担っていたのである。

近年のモンゴル仏教史研究を次の3期に分けてみることができる：

- ・20世紀初頭まで仏教を自らの方法論によって研究していた。
- ・1921～1990年までマルクス主義の無宗教論の面から研究していた。
- ・1990年以降、科学的方法によって研究している。

一般に、宗教原典を研究するには基本的に2つの方法があり、1つは宗教を内部から、その宗教を信仰し、尊重する立場から研究する方法であり、もう1つは宗教を外から研究する方法、この2つがある。モンゴルでは仏教研究が20世紀以前、第一の方法つまり仏教を内部から研究する方法が支配的であった。

しかし20世紀以降、モンゴル人は東西の多くの宗教文化に触れたため、仏教について科学的方法によって研究する活動を始めたのである。

しかし、20世紀20年代よりマルクス主義の無宗教論がモンゴル政権の公式見解となったことと関連して、仏教に批判的に立ち向かい、一切の宗教信仰を、人民大衆を蒙昧にさせる欺瞞に満ちたものであるという面から説明することを容認したのであった。

社会イデオロギーがこのような条件で、モンゴルの歴史家、哲学者たちは仏教を批判するとともに、その正しい知識提供と研究を行ってきた。その例として、歴史学者 Sh. ナツァグドルジ、Zh. サンボー、S. プレブジャブらは研究によって、20世紀以前のモンゴルの仏教史に関する重要な文書資料と統計資料を提供し、Ts. ダムディンスレン、B. リンチェンら有名な文学・言語学者は仏教文献研究に貴重な貢献を示したのであった。

9 *gCig du bral gyi rnam gzhag legs bshad rgya mtsho las btus pa'i khrul spong bdud rtsi'i gzegs ma zhes bya ba bzhugs so.*

宗教を社会受容とは別に自由に研究し、その中にある成果全てを明らかにして子孫に伝達していく科学的研究が、すでに1970、80年代からモンゴル科学アカデミー哲学社会学法學研究所において、例えば、宗教研究部門において、科学アカデミー通信会員のCh. ジュグデル、アカデミー会員G. ロブサンツェレン、学術博士T. ソドノムダルギアらの指導の下、始められた。彼らが組織した仏教およびモンゴルの哲学研究の学術メンバーの業績は、20世紀においてモンゴルの仏教思想に生じた断絶を継承する重要な意義をもつ行為となったのである。

Ch. ジュグデル博士の著した『15～18世紀のモンゴルの政治社会、哲学思想史』（ウランバートル、1984年）、『Z. アグワーンバルダンの哲学観』（ウランバートル、1978年）、『19世紀末・20世紀初頭におけるモンゴルの政治社会、哲学思想の発展』（ウランバートル、1985年）などの単行本による叢書や、アカデミーの仏教哲学支部から出版された『仏教哲学の潮流』（ウランバートル、1985年）、『モンゴル哲学史の諸問題』（ウランバートル、1987年）、G. ロブサンツェレン著『ナーガルジュナの哲学観』（ウランバートル、1978年）、T. ソドノムダルギア著『アグワーンダダルの著作における哲学・論理学観』（ウランバートル、1978年）、G. ルハグワスレン著『ダンザンラブジャーの哲学観』（ウランバートル、1988年）などの研究書、論文、学術講演は、仏教を各方面から批判的に論じ、禁止され遅れていた政治イデオロギー的条件下で、モンゴルの仏教思想家の名声を保存・恒久化し、それらの著作、活動、主義主張、哲学思想を継承・発展させ、研究関心を生じさせるために重要な貢献をなしたのである。

モンゴル仏教思想家たちの独立した業績と思想的研究について、『モンゴル哲学史の諸問題¹⁰』という著作で明らかにした。この著作において、故G. ルハグワスレン博士はダンザンラブジャーの生涯の思想について、故T. ソドノムダルギア学術博士はアグワーンダダルの論理学思想について、L. テルビシ学術博士はダムツァグドルジの世界の起こりと発展についての思想について、B. ボルド博士はスンパケエンポ＝イシバルジルの歴史哲学観について、Zh. トウムルバートル博士はインジャンナシの芸術・美学観について、それぞれ記述することを目指したのであった。

このようにして科学アカデミーの哲学社会学法學研究所の研究者たち、例え

10 VB, 1990.

ば Ch. ジュグデル、G. ロブサンツェレン、T. ソドノムダルギアらの学者たちは、宗教哲学を宗教の覆いを取り除いて研究する方法を生み出し、宗教社会学と仏教哲学・論理学研究を確固とした基盤を持って開始させ、この方面で若い研究者である我々をリードして教育しつつ90年代を迎えた。1990年以降、モンゴルで市場経済、民主化政策、複合的思想が発展し始めたことにより、モンゴルの伝統仏教が復興するとともに、仏教研究も科学的位置を占めたのである。

無宗教観は、宗教を全面的に批判する傾向があったが、科学的宗教研究は、宗教が有する良い面と悪い面の両方を正しく研究することを目指す。現在、モンゴルで行われている仏教研究は、仏教を研究する現代科学的方法の伝統に従っている点に特徴がある。

現代モンゴルにおける仏教研究の方向性と主たる研究者：

1990年以降、仏教史を原典によって解釈することが可能となり、この方面で、アカデミー会員の Sh. ビラ、L. テルビシ博士、Sh. ソニンバヤル、D. ダグワドルジら多くの歴史学者が業績を著したほか、最近、修士論文、博士論文などの業績が次々に出ている。

仏教文化に関わる原典研究では、今日、L. フレルバータル博士、D. ツェレンソドノム、Sh. ドラム、Sh. チョイマー、D. ブルネーらの著作が高い評価を得ている。

1990年に出版された Ch. バーブガイ、B. ボルドサイハンらの『モンゴルの伝統医学』という本において、医方明に関するチベット語原典を資料とし、モンゴル人たちの民間医療理論の概念を解説したのであった。L. テルビシ博士は、モンゴル人がチベット語で著した暦学に関わる著作として80人以上の賢者の300以上の著作について研究し、インド、チベット、モンゴルの暦学の共通点と独立した要素を明らかにし、モンゴル暦学を解説した。L. フレルバータルは、仏教の詩作論について、エルデネ＝メルゲン＝パンディダ＝ハンチン＝ハンバ＝ジャミヤンガラブのこの方面の著作がいかに発展・充実したかを、インド、チベット、モンゴルの各時代の論釈と比較研究する方法で行った。¹¹

1998年に故 D. ダグワドルジ博士は『モンゴル哲学者の著作集』を出版し、古

11 Л. Хүрэлбаатар. *Эсэрүагийн эгшиг дуун*. УБ, 1999.

代インドのナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、アーリヤ＝アサンガ、ヴァスバンドゥらの思想からチベットのアティシャ（A ti sha, 982-1054）、ツォンカパ（Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419）、トガン＝ゲゲーン＝ロブサンチョイジニヤム（Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma, 1737-1802）らを経て、彼らがモンゴルの賢者たちの活動の基盤となったことを示した。

1990年代以降、科学アカデミーでの研究は、国家からの財政援助が限定的になりはじめたため、我々研究者の多くはモンゴル国立大学で教鞭をとるようになり、次第に哲学科に付属していた仏教哲学クラスを独立した宗教研究学科に拡張し、この方面で学士、修士、博士課程教育を行う要望が出されたのを、当時のモンゴル国立大学の執行部とアカデミー会員のS. ノロブサムボーらが深謀遠慮し、果敢に、学問的基盤からこれを支持した結果、宗教研究という、科学的に独立した新たな学問分野をモンゴルで発展させる重要な一歩となり、現時点で、教育研究を行う唯一の機関が我々の学科であると言っても過言ではなくなっている。

モンゴル国立大学哲学科の学科長であったN. ハブフ教師は、1995年に仏教哲学クラスに学生を取り、専門科目を主として哲学社会学法學研究所の宗教研究部門の学術研究員である我々に教授させ始めたことは、実際、我々の学科の始まりであった。

1998年に最初の卒業生が出て以来、14年が経過している。この間に我々は200人ほどの学士、50人以上の修士、15人の博士を育成した。卒業・修了生たちは、伝統的な宗教信仰、風俗習慣、精神文化史と社会・哲学研究の方面で様々なプロジェクト、研究、教育活動に参加している。

モンゴル国立大学宗教研究学科において、モンゴル仏教研究、特に仏教研究の基盤となる仏教哲学研究の主たる方向性が示されている。2000年～2003年に出版されたモンゴル哲学史4巻本のほとんどの章を当学科の研究者たちが著した。

モンゴルの哲学の中でも仏教哲学の原典を現代キリル【ロシア】文字に写して出版・研究する事業は、モンゴル国立大学の宗教研究学科の学術的に重要な目的となってきた。学科の修士課程・博士課程のかなり多くの部分がこの方向を目指している。

この研究は、一方で、チベット語の原典を翻訳し、他方で、モンゴル文字の

原典をキリル文字に写すという2つの方向で行われてきたほか、すでに翻訳・転写された原典の哲学的内容を現代的哲学思想の方法によって解釈する作業も同時に行われてきた。

アカデミー会員のG. ロブサンツェレン師は1992年にモンゴル仏教研究所を設立し、仏教思想の原典として Monumenta Buddhica シリーズを刊行しはじめたことは、現代キリル文字モンゴル語にて古代インドの高名な仏教哲学思想家、例えば世界の六莊嚴として名を馳せたアサンガ、バスバンドゥ、ディグナーガ、ダルマキールティ、ナーガールジュナ、アーリヤデーヴァらの業績を出版する最初の事業となったのである。この事業に彼の弟子であるG. ルハグワスレン、S. ヤンジンスレン、E. アリオナーらの研究者が参加した。例えば、G. ロブサンツェレン師は、聖者ナーガールジュナの『中観全書』(2002年)、S. ヤンジンスレン、E. アリオナーは、仏教論理学の大成者ダルマキールティの『量評釈』¹²(2000年)、G. ルハグワスレン博士はアサンガの『撰大乘論』、『大乘阿毘達磨集論』という重要な2著¹³(2005年)、M. ガントヤー私自身は、聖者ヴィムクティセーナの『現観莊嚴論釈』¹⁴(2004年)、ヴァスバンドゥの『阿毘達磨俱舍論』¹⁵(2009年)を、それぞれモンゴル・ダンジョールからキリル文字に写して出版した。

モンゴルにおける仏教作品は無数の業績があり、独立した研究分野となっている。1990年代以降、仏教哲学研究は、総じてモンゴル人たちの哲学思想の伝統を回復し、新たな典籍を確定して学界に提供し、その内容と思想を現代的に

-
- 12 1. *Tshad ma rnam 'grel gyi tshig le'ur byas pa.*
 2. *Tshad ma rnam par nges pa.*
 3. *Rigs pa'i thigs pa zhes bya ba'i rab tu byed pa.*
 4. *gTan tshigs kyi thigs pa zhes bya ba'i rab tu byed pa.*
 5. *'Brel pa rtag pa'i rab tu byed pa.*
 6. *rTsod pa'i rigs pa zhes bya ba'i rab tu byed pa.*
 7. *rGyud gzhan grub pa zhes bya ba'i rab tu byed pa.*
- 13 1. *Theg pa chen po bsdus pa.*
 2. *Chos mngong pa kun las stus pa.*
- 14 *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa.*
- 15 *Chos mngon pa'i mdzod kyi rang 'drel.*

解釈し、さらに仏教哲学の現代の研究者の思想の重要な一要素となして発展させることを目指している。

21世紀になって、仏教原典を哲学研究に関連させるだけでなく、教育学、心理学、宗教研究、文献学といった社会学・人文科学の多くの分野の学者、若手研究者たちが仏教原典を翻訳出版することにより多くの関心を示すようになった。

伝統的そして現代的モンゴル仏教研究は、仏教の大小五明の分類によって組織的に行われている。

仏教の大小五明の基盤となる内明は、顕密2つに分かれ、顕教において經典を介して学ぶのに対して、密教においては、仏教哲学の頂点の本質を瞑想によって直接会得する実践がなされる。

密教研究は最近盛んになっており、D. ダグワドルジ教授はこの方面の研究を開始して、多くの業績を著した。

顕教において仏教哲学を学ぶ際に、チョイルの五部を基本的な5つの研究対象とみなす。

モンゴル国立大学宗教研究学科はチョイルの五部それぞれの研究を、教育と関連させて行っている。それら各々を独立の授業として研究していることは、仏教の内明の伝統的教授方法を学術分野で復活させようという試みなのである。

仏教哲学の説一切有部方面の著作としてモンゴルの思想家が行った論釈のうち、ツォルジ・ガブジ・アグワーンバルダン (Chos rje dka' bcu Ngag dbang dpal ldan, 1797~1864) の著した『俱舎論解明・初学者の遊戯』¹⁶、ガブジ・ダンザンチョインゾド (dKa' bcu bsTan 'dzin chos mdzad, 19世紀) の『俱舎論解明・智慧歓喜生』¹⁷、ガブジ・ロブサンバルダン (dKa' bcu Blo bzang dpal ldan, 19世紀) の『五蘊論註』¹⁸ という著作は特に言及に値する。

中観哲学の問題について著されたモンゴルの思想家たちの論釈は極めて多く、例えば、アグワーンバルダン (Ngag dbang dpal ldan, 19世紀) の『入中論註』¹⁹、ハンチン=ハンバ=ジャミヤンガラブ (1861~1917) の『四百論註』²⁰、ガブジ・ダ

16 *Chos mngon pa'i mdzod kyi dogs dpyod blo gsar rol rtsad.*

17 *Dam pa'i chos mngon pa mdzod kyi dogs dpyod blo gsal dga' skyed.*

18 *Phung po lnga'i rab byed kyi 'grel pa gser gyi lde mig.*

ムデイン (dKa' bcu rTa mgrin /rTsa ba rTa mgrin, 1864~1937) の『広破論註』²¹、ツェムベル=ゲーシ (19~20世紀初頭) の著した『四百論の排列』²²、ダンドル=アグラムバ (bsTan dar sNgags rams pa, 1835~1915) の『中観光の忘備録』²³、ロブサンサントゥブ (Yil go san hu thog thu Blo bzang bsam grub, 1820~1882) の『入中論註復註』²⁴などの著作に言及したい。

瑜伽哲学の著作には、ハムバ=ノムン=ハン=アグワーンハイダブ (Ngag dbang mkhas grub, 1779~1838) の著した『瑜伽師地論菩薩地戒品註』²⁵、『中観・唯識の世俗諦に対する見解を明らかにする書』²⁶、ツァハル=ゲブシ=ロブサンツルテム (Cha har dge bshes Blo bzang tshul khriims, 1740~1810) の『現観莊嚴論註』²⁷、ダムデインの『法法性分別論註』²⁸など、モンゴル人の行った論釈は極めて多い。

最後に、仏教論理学の問題についてモンゴルの思想家たちが行った数少ない論釈について例を挙げて言及しよう。上部モンゴルのスンパケェンポ=イシバルジル (Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, 1704~1788) の『因明七論の心髓宝』²⁹、アルシャー=ラーラムバ=アグワーンダンドル (A lag sha lha rams pa Ngag dbang bstan dar, 1758~1830) の『無相思塵論註』³⁰、『成他相続論註』³¹、ロヴォン=ソドノムジャムツ (Slob dpon bSod nams rgya mtsho, 19世紀) の著した『宗法九句註』³²、アグワーンハイダブの著作『灯了悟』³³、ツォルジ=ガブジ=ロブサンチョ

19 dBu ma la 'jug pa'i tshig 'grel legs bshad rjes 'brang zhes bya ba bzhugs so.

20 dBu ma bzhi brgya pa'i 'grel pa.

21 dBu ma'i bstan bcos zhib mo rnam 'thag gi 'grel pa.

22 bZhi brgya pa'i bsgrigs thams cad mkhyen par bgrod pa'i lam mchod.

23 dBu ma snang ba'i brjed tho.

24 dBu ma la 'jug pa'i tshig don gyi 'grel bshad.

25 Byang sa'i tshul khriims le'u'i dong 'grel bstus don.

26 bsDus nas bshad pa'i kun rdzob tu yod tshul gsal byed tshig gi sgron me.

27 mNgon rtogs rgyan kyi 'grel pa.

28 Chos dang chos nyid rnam byed kyi 'grel pa ring chen sgrom me.

29 Tshad ma sde bdun kyi snying nor.

30 dMigs pa brtag pa'i 'grel pa mu tig 'phrang mdzes.

31 rGyud gzhan grub pa zhes bya ba'i bstan bcos kyi 'grel pa mkhas pa'i yid 'phrog.

32 Phyogs chos 'khor lo'i 'grel pa phyogs glang dgongs rgyan.

33 sGron me rtogs pa.

イジン (Chos rje dka' bcu Blo bzang chos 'dzin, 19世紀) の『量評釈読誦法』³⁴、ダルマキールティの『量評釈』という著作にアグワーンツェレン (Ngag dbang tshe ring, 1785~1849) が著した論釈³⁵などがある。このようにしてモンゴルの思想家たちは仏教哲学、論理学の潮流の点で多くの教科書、摘要を著した。その例としては、スンパケンポ=イシバルジル、ロブサンツルテム (Blo bzang tshul khirms)、ロブサンペレンレイ (Dza ya paṅḍi ta Blo bzang 'phrin las, 1642~1716)、シジェー=ガブジ (19世紀) など多くの思想家たちの業績を言及することができる。仏教がモンゴルの社会生活にいかなる役割を果たしているかという問題を宗教社会学面から研究することを、S. ツェデンダムバ博士が首唱し、多くの若手研究者が輩出している。

同様に、我々の歴史家・宗教研究者の中から、仏教寺院の歴史、化身の伝記、芸術作品についての情報を正しく大衆に伝え、1930年代の粛清にあった寺院・ラマ僧侶の名誉を復活するなどの事業が広く行われている。仏教の歴史、原典、ラマ僧、思想家の面で、新しく興味深い情報と研究成果が発表され続けている。

L. フレルバートル博士は1996年に出版した『天空の白いガルーダ』という著書において、オンドゥル=ゲゲーン=ザナバザル、ザヤ=パンディタ=ロブサンペレンレイ、ハムボ=ノムン=ハン=アグワーンハイドゥブ、エルデネ=メルゲン=パンディタ=イシサムブー、ドグシン=ノヨン=ホトクト=ダンザンラブジャー、イフ=ソダルチ=タイジ=インジンナシ、ロー=ジャンジン=ゲン、ハンチン=ハムバ=ジャミヤンガラブ、ツァニド=ロボン=シャグダル、ジャルハンツ=ホトクト、ダムディンバザルらの伝記、芸術作品、思想の概要を示したのであった。

また、Sh. ソニンバヤル師、チベット学者 D. ツェデヴ、I. デムベレルらは、オンドゥル=ゲゲーンの伝記をチベット語から翻訳して出版したほか、アカデミー会員の Sh. ビラが、オンドゥル=ゲゲーンの『時期になかった請願文』、すなわち『最高の加持を与えたまえ』という著作³⁶をモンゴル語に翻訳して初めて出版したことは、ザナバザル研究に示した新たな成果である。一方、若手研究

34 *Tshad ma rnam 'grel pa'i 'don thabs shes rab gsal byed.*

35 *Tshad ma 'grel pa.*

36 *Dus bstun gyi gsol 'debs byin rlabs mchog stzöl ma bzhugs so.*

者 D. ガントゥムルはオンドゥル＝ゲゲーンの『マニ甚深成就法』³⁷に哲学史的研究を行った。³⁸

モンゴル仏教の著名な思想家であるザヤ＝パンディタ＝ロブサンペレンレイの伝記と文芸作品の概要を新たな情報を伴って組織的に研究し、宗教哲学的思想を解説し、モンゴル仏教文化の発展に示した役割を評価した重要な業績は、D. デムベレルドルジ副博士の学位論文である。また、S. ヤンジンスレン副博士は学位研究において、モンゴルの大学匠ザワー＝ダムディンについて研究し、その伝記と文芸作品の概要を詳細に示したほか、ザワー＝ダムディンの論理学・認識学思想について哲学史的分析研究を行った。上述の研究者たちはそれぞれの研究対象がチベット語で著した作品を学術界に示した点で、モンゴル仏教研究に示した貢献は大きい。このようにモンゴル仏教思想家についての研究は、日増しに発展しており、仏教哲学思想の発展においてモンゴル人が示している貢献と特異性を明らかにする可能性がさらに開かれてきている。

総じて、モンゴルの化身仏が認定される過程を研究者たちは様々に解釈している。例えば、『モンゴル哲学史』第3巻において、O. チメグ研究員は、「化身仏を認定する過程は、チベットで起こった³⁹」と明示しているが、化身仏を認定する活動は、モンゴル人たちの伝統的思想と関連するという立場を私は取っている。

掌印化身仏が生じた理由を説明し、歴史研究において述べる際に、「旗【モンゴルの行政単位】の化身仏の弟子（シャビ）たちの数は、年を経るごとに増加し、彼らの家畜の数はその旗の牧地に収まらなくなり、次第に独立して、弟子たちが自治する「印」（＝権利）を持つ必要が生じたのは、ジェブツンダムバ＝ホトクトのほか、ザサグトハン・アイマグのジャルハンズ、ヤルゴグサン、（ベゲルの）ノムン＝ハン、セチェンハン・アイマグのイエグゼル、ヤルゴグサン、サインノヨンハン・アイマグのザヤ＝パンディタ、エルデネ＝パンディタ（＝ラマイン＝ゲゲーン）、チン＝ススグトゥ＝ノムンハン、ナルバンチン、エルデネ＝メルゲン＝ノヨン＝ホトクト、シヴァ＝シレート、ナラン＝ホトク

37 *Ma ni'i sgrub thabs zab mo bzhugs so.*

38 *Монголын философийн түүх. I хэсэг. 2-р бүлэг. §3.*

39 *Монголын философийн түүх. III дэвтэр. УБ, 2001, 108 дэх тал.*

ト、ハムバ=ホトクトといったハルハ地方の4アイマグの全人口の20%ほど、家畜の10%ほどを統括する権利をもつ13人の掌印化身仏が登場する基盤となったのである」などと書かれている。

モンゴルで最近、化身仏を崇拝する活動を支持する様々な方法が取られているうちの1つは、化身を新たに認定する過程である。

掌印ラマを新たに認定したことに関する情報は以下のとおり：

1. ザヤ=パンディタ=ロブサンベレンレイ

G. ジャムツ研究員が提起し、第7世ザヤ=ゲゲーン=ロブサンダンザンプルジンジグメドの認定を行った。彼はダライ=ラマに許可を願う書状を政府機関から送り、ジャダイリンポチェ師が「バヤルトゥ」という名の人物を認定し、エルデネマンダル、ハイルハン、バトツェンゲル郡の境界の地のツォルギン=ダワーニイ=アルという地で認定された。

2. ゴビ・トゥシェー=グンの大化身バリグリ=ダムツァグドルジ化身の第4世の認定

ドンドゴビ=アイマグの地方議会の副議長 Ts. ガンフー、モンゴル仏教徒センターガンダン寺附設・宗教大学のガブジ=ソニンバヤル博士、そして地元人士が提起し、2001年から認定作業を開始した。第4世としてオムヌゴビ=アイマグのツォクトツェツィー郡の市民ウイトゥメンの末子10歳でウマ年生まれのものフスフをダライ=ラマの命によって推戴した。化身仏を自宅から将来し、ドンドゴビ=アイマグのサイハン=オボー郡にある初代化身が建立した「オンギン=ヒード」の御座に将来する儀式を行った。化身の頭髪を断髪し、沐浴した後、袈裟を身に着け、玉座に将来した。4世は南インドにあるセラ寺に16年留学し、満了して故郷に戻り、善行に邁進している。

3. オルホン郡の「ヤルゴーサン=ホトクト寺」のハムバ、掌印シレート=ラマであるヤルゴーサン=ホトクト・Z. ゴンジグジャブは、79歳のときにアメリカに本拠をもつ国際モラル連盟から提起されたことを受けて、モンゴル・モラル研究国際連盟は、掌印第10世化身に認定した。印は2007年4月14日にオルホン=アイマグの「ヤルゴーサン=ホトクト寺」に手渡された。

4. 2013年3月12日、ノヨン＝ホトクト＝ダンザンラブジャーの転生が認定され、インドにおいて御座に将来してきたモンゴル国の代表者たちが公式に宣言した。ノヨン＝ホトクトの転生を400人以上の中から認定し、それは幼少より学問の道を行んだ一人であった。オグタフバヤルは幼少時に「ハマリン＝ヒード」に弟子入りし、その後、ダシチヨイリン寺院に3年滞在した。さらにインドで仏教を7年間学んだ。帰国して宗教学院に入学し、昨年、卒業した若者である。

5. ラマイン＝ゲゲーン・ロブサンダンザンジャンツァン

17歳の転生者を認定し、インド留学に派遣した。

6. チン＝スゼグト＝ノムン＝ハン＝ホトクト＝ロブサンノロブシャラブは、インドにて、バルドゥジン、ツェヴェーンバザル、シーラブペレンレイ、ブレン＝オルゾド、グルヴォバ、チベットにてルハヴァーンドルジ、ソノムダグワ、ソノムドルジ、ロドイデミド、バンシャラブ、レンツェンバル、ガンジョールジャブと、12回転生し、モンゴルにおいてロブサンノロブシャラブの名でその後の転生を継承し、モンゴルで第5世として転生した。この化身の転生者は認定されているが、今のところ、公けにされていない。

このように20世紀初頭まで崇拝されていたモンゴルの化身仏は、思想家たちの名声を聞かしめ、活動を継続し、新たに転生者を認定する様々な活動が行われているにもかかわらず、統一的な方針が定められていないため、現在、認定された化身が本当に転生であるかどうか、疑いがもたれている。今後、この方面で研究の統一的な方法を深める必要が生じている。(了)